

---

# 茶釜と狐と怨霊と

鷹嶺綺羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茶釜と狐と怨霊と

### 【Nコード】

N3810E

### 【作者名】

鷹嶺綺羅

### 【あらすじ】

萌子の母から水瀬の元に来た依頼は、「茶釜」の探索。すっかり忘れた頃、不可思議な連続殺人事件が起きる。その背後には、水瀬にとって最重要人物の影が……。 「胸と着物とお茶」の全面リニューアル作品を目指します。でも、あまり比較しないでくださいね？ …… 作者が惨めになるので（涙）

## 第一話

水瀬邸 茶の間

ある日曜の午後のことだ。

「水瀬君」

茶の間に入ったルシフェルの目の前で、水瀬がコタツで眠っていた。

丸くなって幸せそうな寝顔を浮かべる水瀬を見ると、なぜか猫を連想してしまう。

猫はコタツで丸くなるし、寝る子は育つというけど、少なくとも、後者は水瀬君限定でウソだ。

ルシフェルはそう思う。

いつも寝てばかりなのに、水瀬君は心身共に成長しないじゃない。クー……スー……

水瀬の穏やかな寝息が午後の気だるい雰囲気をさらに気だるくさせる。

「……もうつ」

時計を見たらまだ午後2時。

お昼まで寝ていて、さらに寝るのか？

ルシフェルはあきれ顔で水瀬に近づくなり、乱暴に水瀬の肩を揺すった。

「水瀬君っ！」

「……ふえ？」

水瀬は寝ぼけ眼のまま、ぼうつとした視線をルシフェルに向ける。あれ？

なんで？

水瀬が現実を受け入れられずにいるのは、表情でわかる。

「……ルシフェ？」

その言葉が、水瀬の口から出てくるのには、時計の秒針を一回転

させる必要があった。

「もう……いつまで寝ているの？おコタしまっちゃうから」

「……うん」

どうでもいい。

水瀬の顔はそう言っていた。

いや。

ルシフェルは、水瀬の瞳の奥に隠れた別な感情を見逃さなかった。

「何？」

「えっ？」

「すごい、不満って顔だよ？起こされたの、そんなにイヤだった？」

「……」

こんつ。

水瀬が額をコタツの天板に額を乗せて沈黙。

暗にそれを認めた。

「……いつそ」

そのままの状態で、水瀬がポツリと言った。

「夢のままだったら、どれだけ幸せだったろうなあ」

「何？そんなに楽しい夢でも見ていたの？」

「……うん」

クスン。

ルシフェルから水瀬の表情は見えないが、どうやら泣いているらしい。

「クスッ。何？カワイイ女の子でも出てきた？」

ルシフェルは、悪戯っぽく訊ねた。無論、それは彼女にとって、他愛もない冗談に過ぎない。目の前の男の子にとって、意識する異性なんて、一人しかないのに。

だが、

「女の子じゃなくて」

水瀬は、ルシフェルの予想もしなかった言葉を口にした。

「女性だよ」

「えっ？」

「立派な女の人……はあ」

「……瀬戸さんに告げ口しちゃうから」

「……どうでもいい」

「えっ？」

ルシフェルは目を見開いた。

瀬戸綾乃。

自称、水瀬の許嫁。

その嫉妬深さと暴走のすさまじさは、水瀬を震え上がらせて止まない。

その相手さえ恐れない。

水瀬はそう言ったのだ。

「な……ウソでしょ？まだ寝てるの？」

「本当だよ」

水瀬はようやく顔を上げた。

「“あの人”のことは、例えば綾乃ちゃんでも悪口言ったら許さないんだから」

「……」

「それで、どうしたの？」

水瀬から聞かされた言葉に、ルシフェルは危つく自分が何を水瀬に告げようとしていたか、忘れる所だった。

「お父様とお母様が夜、いらっしゃるそうよ？」

「何しに？」

「私の着物探しに銀座に来てるんだって」

「……ああ、ルシフェ、茶道始めるんだっけ？」

天板に顎を乗せた水瀬は、ぼうつとした顔で、ついさっきまで見ていた夢を思い出していた。

夢の中で、水瀬は一人の女性を抱いていた。

互いに愛を囁き、恍惚としたまでの肉欲に溺れていた。

夢とは夢想のことか？

違う。

そう。

それは、水瀬の過去。

現実なのだ。

例え夢の中といえ、そのすばらしさは例えようがない。

「所で」

ルシフェルがその華奢な腰に手を当てた。

「人事局の要請、また断ったそうだね」

「当たり前」

水瀬はにべもなく答えた。

「あの戦争の時の契約だつて履行されていないんだよ？どうやって契約しろつていうの？」

「契約？」

近衛騎士団の契約は、金銭が普通。ごく希に物納を希望する者もいるが……？

そういえば、水瀬君って、いつもお金がないお金がないっていうし、お父様から仕送り受けているけど、その辺、どうなんだろう？いくらを要求して、契約が履行されないんだろう？

水瀬君って、生活費以外のお金には淡泊なんだけど……。

「よく、わかんないけど」

ルシフェルは困惑気味に言った。

「でも、樟葉さん、困っているよ？」

「問題の契約、持ちかけたのは僕じゃなくて樟葉さんだもん」

「何を 契約したの？」

「……」

水瀬は、しばしの躊躇の後、言った。

「笑わない？」

「笑わない」

「絶対？」

「笑ったら」

ルシフェルは少し考えてから言った。

「一週間、お昼、好きなものおごってあげる」

「……」

ルシフェルが、それほど深く考えていないのは水瀬にもわかる。  
そんなルシフェルに水瀬は、ポツリと言った。

「お嫁さん」

銀座某着物店

「おい、いい加減にしろ」

うんざりという声をあげたのは、由忠だ。

開店時間に入ったのに、もう日が暮れる。

それでも妻のお眼鏡にかなうものがないらしく、倉庫から出された反物はすでに山になっている。

妻の買い物時間の長さは、夫として身にしみてわかっていたが、今日は酷すぎる。

なにより、金額が最初の頃と比較して、優に3ケタ上がっているのはマズい。

「何を言うのですか？」

反物の山をバックに不満そうに答えるのは遥香だ。

「娘の初着物ですよ？親として、念には念を入れておかないと」

「だからといって、モノには限度というものがある！」

「そんなに不満でしたら、言っているじゃないですか。クレジットカードだけおいていってくればいいって　あ、そっちの反物も見せてくださいな」

「……それ、いくらだ？」

「こちらはおいくら？2500万？いい柄ですわねえ」

「ちよつ！？俺を破産させる気か！？」

「妻の私がいいと言つのです。それに、不満ならもつと稼いでいらつしゃいな」

同じ頃、東京都千代田区某所

「聞ってるの！？」

広い和室に声が響く。

「聞いてますよお……」

気のない返事が、相手の神経を逆撫でする。

「じゃあ、今、何て言つたか言つてみて！」

「要するに、拓也さんが冷たいって、そういいたいんでしょう？」

「そう！ 聞いてたんだ」

「何度も聞かされれば覚えます。全く……人がオークションみてる時に邪魔するんだから」

「ママ……その姿、似合わない」

不満顔で言うのは、巫女装束に身を固めた萌子だ。

萌子が見つめる先、そこには、同じように巫女装束を纏う母の姿があつた。

巫女がネットオークションに打ち込む姿は、確かに似合わない。まして、その中身の正体を知れば尚更だ。

「大体、オークションって、何探しているの？」

「お値打ちモノ」

「？」

母の背後に立つた萌子は、画面を見る。

「何？ 夫を立身出世させる方法教えます。著者山内千代？支払いは一括。送料無料？」

「他にもね？名物茶器「平蜘蛛」高値で買いますだって。売ろつかしら」



「誰が？」

「織田信長さん。あの人、生きていたのねえ。そう言えば、あの釜、どうしたっけ」

巫女はパソコンの前から立ち上がると、部屋から出ていった。

「確か……あら？何かに使ったはずよねえ。何だったかしら？」

翌日 葉月市 夢幻茶道教室前

「ありがとうございます」

深々と頭を下げているのはルシフェルと萌子だ。

「いえいえ。水瀬さん。よければ通って下さいね？あなた、かなり筋はいいから」

人の良さそうな初老の女性がそういつてルシフェルに教室の案内を手渡す。

「ありがとうございます。帰って家の者と相談してみます」

茶道教室近くの喫茶店

萌子があんみつを食べながら言った。

「お姉様が茶道に興味があつたなんて知らなかった」

「うん。お茶は好きだから。むしろ、萌子ちゃんが通っていたのに驚いた」

対するルシフェルはお茶に白玉団子。

ルシフェルに言わせると、「お茶」団子「は黄金律だ。」

「へえ。私なんて稽古事程度にしか考えてないから、お姉様はやっぱりスゴイです」

「お茶、おいしくない？」

「苦いだけです」

きつぱりと言い切る萌子は薄い桃色の着物姿。対するルシフェルは制服姿。

学校の帰り道で茶道教室の張り紙を見つけたルシフェルが、どう

したものかと教室の中をうかがっていた所を、この教室に通う萌子により、中に連れ込まれた帰りだ。

「足、痺れるとか？」

「普段から正座には慣れてるから、それは平気」

「水瀬君は、それがイヤだから茶道はしたくないって」

「お兄ちゃん、そういうところズボラだから」

「言えてる」

クスクス笑い会う二人。

「あ」

萌子は、ポンツと手を打ち、巾着の中から手紙をとりだした。

「ルシフェルさんかお兄ちゃんのどっちかに渡してくれて、ママに言われていたの」

「私達に？」

差出人は、確かに水瀬とルシフェルの連名になっている。

だが、

『江戸府内何処か』

としか住所が書かれていない。

「これで届くと思ってるの？っていうか、江戸って……」

「ママの感覚って、こうだから……恥ずかしくて」とうつむく萌子。中身は和紙に達筆な筆で何かが書かれているが……。

「ゴメン。こういうの、まだ読めないの」

ルシフェルは何度も見直した後、申し訳なさそうに手紙を封筒にしまった。

あまりに達筆すぎて、ルシフェルには、これが文字なのか、単に筆で複雑な線を書いているのか、それすら理解できなかったのだ。

「帰ってから、水瀬君にでも読んでもらう」

「読みましょうか？」

そういつて左手を出してくる萌子だが、なぜか右手には、ルシフェルの団子があった。「読めるの？」

ルシフェルは、こういう図々しい所は、さすがあの水瀬君の妹だ

と思ったが、あえて無視して、手紙を萌子に渡す。

「娘ですから」

萌子は手紙を取り出しながら言った。

「困るんですよ。ママの時代がかった書き方って。本人は、これが最先端の書き方だって信じて疑っていません。で、小学校の時、母が手紙で私の欠席を伝えたことがあるんです。そしたら、学校の先生達、何て書いてあるかわかんなくて、私が説明するまで、私、無断欠席扱いだったんですよ？」

いいつつ、ざっと母親の手紙を見た萌子の表情が固まる。

「どうしたの？」

「えっと……これ、仕事です」

「仕事？」

「”平蜘蛛の釜”をなくしたから探してくれって」

「何？それ」

## 翌日 明光学園大食堂

戦国時代、松永久秀という武将がいた。

主家を滅ぼし、將軍を暗殺し、東大寺大仏殿を焼き払うという史上希に見る悪事を成し遂げ、織田信長に謀反をしかけるが居城信貴山城を織田軍に包囲され、1577年10月10日壮絶な爆死を遂げている。

「その久秀が持っていたのが、平蜘蛛の茶釜だよ」

そう説明してくれたのは博雅だった。

「正確には、古天明平蜘蛛<sup>こてんみょうひしくも</sup>。信長が所望し、差し出せば久秀を助命するとまで言わしめた天下の名物」

「引き渡したの？」

「いや？一説には、“久秀の白髪首と平蜘蛛の茶釜だけは信長に渡

さない”とかなんとか言つて、茶釜と自分を鎖で結びつけ、茶釜の中一杯に火薬を入れて火を付けたと　　だから、久秀は、日本で初めての爆死による自殺者とも言われるんだ」

「……まあ、歴史上じゃ、そうなってるよねえ」

と、何でもないといわんばかりの口調で言うのは水瀬。

その目の前には、ハンバーグの載ったA定食とエビフライの載ったB定食、さらにアイスやジュースが並んでいる。

「それがどうしたんだ？」

おいしいおいしい。と、ホクホク顔の水瀬と、素うどんを食べながら苦り切った顔をするルシフェルを前に、博雅が首を傾げた。

「歴史小説にでも興味が？」

「あのね？」

ルシフェルが言った。

「それ、探してくれて頼まれて」

「……ルシフェル。俺の話聞いていたか？あれは数百年前、既に

あつ！」

博雅が驚いた声をあげ、額を軽く叩いた。

「すまん。平蜘蛛なんていうから、てつきり久秀の方かと思ったけど、それなら違うな」

「違う？」

「ああ。「平蜘蛛釜」の方だろう？」

「どう違うの？」思わず水瀬とルシフェルが顔を見合わせた。

「「平蜘蛛釜」は、蜘蛛がはいつくばっているような形をした茶釜のことさ。これならあちこちにあるはずだ。南部鉄器とか」

「ないはずの物と、ありすぎる物……かあ」

水瀬がフォークを口にくわえながらぼやいた。

「極端だねえ」

「おい。水瀬？誰か、平蜘蛛釜を欲しがっているのか？」

「……詳しく、話を聞かないとダメみたいだね」

「？」

「水瀬君……私、よく知らないんだけど、あの人って、何者なの？」

「僕も詳しくは知らないよ。ただ、もの凄い凄い過去があるとは聞くけど。博雅君の言う爆死って、あの人が証拠隠滅しただけかも……そうだ、ルシフェ。茶道、教えてもらったら？千利休本人に習ったらしいから」

「……」

「……」

「多分、本人が言ってるのは、久秀と共に失われたはずの方の平蜘蛛の茶釜だよ。そんな貴重な物、なんでなくすかなあ」

「誰かに貸したまま、忘れていたとか」

「なんだか、あの人のことだからあり得るのが怖い」

「なあ、誰のことだ？」

「ゴメン。それは内緒。ただ、やんごとない身分の方としか言いようがない」

「そ、そうか……」

「気を悪くしないでね」とルシフェル。

「これ、博雅君のためだから」

「あ、ああ……わかつているが」

「？」

「どうやって探すんだ？そんなもの」

「聞いてみる。きっと随分と厄介な理由があるはずだから」

## 第二話

夜 東京都千代田区某所

「あの頃、茶器にはもの凄い意味があったのよ」

訊ねてきた水瀬達を前に語り出したのは、萌子の母親だ。

とても東京都内とは思えないほど広い和室の真ん中に差し向かいで座る二人から手みやげを受け取った萌子の母親は、嬉しそうに包みをほどこにかかり、母親の横に座る萌子が顔をしかめた。

「茶器一つが一國に匹敵する意味を持つといえ、考えられる？」

あら。芋ようかん？私、大好き。

萌子の母親はどこからか短刀を取り出してその場で切り始める。

「博雅君　いえ、友人から聞きましたけど」

あの短刀、たしか国宝だったなあ。と、水瀬は困惑気味の顔で訊ねた。

「いつのことです？」

「天正年間あたりかしら？」

「？」

「俗に言う戦国時代ですか？」

「最近ではそう呼ぶわね」

萌子の母親は、同じることなくお茶を二人に勧めた。

「あの当時、私と私の率いた一団は、その値打ち物を求めて、戦場を渡り歩いていたわ。本能寺に忍び込んで、大量の茶器をノブさんから横取りしたあの時の爽快感は、いまでも忘れられないわ。まさかミッチーがああいう行動に出るのは予想外だったけど」

いい証拠隠滅になっちゃった　と萌子の母は笑った。

「ノブさんとかミッチーって？」

「多分……織田信長と明智光秀のこと。違います？」

「そうですね？ミッチーの軍勢が邪魔だったから、ちょっと唆したらノブさん殺しに行くんだもん。びっくりしちゃった」

「……本能寺の変」

「懐かしいわあ」

「どうですか？と、どこから出したのか、小皿に載った芋羊羹とお茶が水瀬達の前に出された。」

「でも、それだけの値打ち物でも、たかが茶釜でしょう？タヌキが出てくるわけでもなし」

「お兄ちゃん、それ違う茶釜」

「似たようなものよ」

「へ？」

「その後、ヒマだったし、材料たくさんあったから、天保の大飢饉の時に魔導実験したのね？」

「魔導実験？」

「そこら辺に転がっている死体、たくさん集めて妖魔を作る実験。出来はしたんだけど、それを封じておく適当な器がなかったから

「当時はもう、茶器の価値も急落していてね？これでいいやつて、その茶釜を使ったのよ」

「……」

「……」

「……」

「あれは私の最高傑作の一つ。もったいなくてとっておいたはずなんだけど」

「で、その妖魔って？」

「蜘蛛よ」

「蜘蛛？」

「そう。糸を吐くアレ。平蜘蛛の茶釜に蜘蛛の魔物  
因果ねえ」  
うつとりとした母の前で、萌子は呟くように言った。

「……因果を作ったのは誰よ」

事件は2週間後に起きた。

犠牲者は茶道教室の先生で、武田という女性。

事件の直前、武田は一人で茶室に入ったという。

弟子の一人が、茶菓子を持って茶室に向かう途中、茶室からの悲鳴を聞きつけ、茶室に入った所で現場に出くわした。

「何をどうやってたら、ここまでのことが出来るんや？」

京都府警の堀警部は、赤く染まった茶室を眺めながら呆れたような口調で言った。

「この狭い中で人間を粉々にするやと？」

「切り刻んだ。と言う方が正しいです」と部下の飯田が言った。

「死体には生前に切断された痕が」

「じゃ、どうやってや？刀で切り刻んだともいうんか？」

「それが、ヘンなんですよ」

「何がや」

「いえね？検死医の神田センセが言うには、切断の痕は、みんな生前につけられたものだっていうんです」

「それがどうした？」

「生きたままの人間を、短時間に、粉々にするなんて、不可能ですよ」

「騎士なら出来るやろが」

「この狭い茶室で、どうやってですか？」

確かに天井が低く、これでは刀は振るうことは出来ない。

「何やるな……で、なくなっているモノは？」

「それが」

「何や」

「茶器は一通りあるのに、なぜか肝心の茶釜が、ないんです」  
「はあ？」



京都某撮影所

「はいカット！」

撮影は順調だった。

何しろ、今回は綾乃をヒロインとしたチャンバラ物。

瀬戸綾乃時代劇初挑戦とあって、話題性も十分な上、こつも撮影が順調なら、事務所としてもこれに勝る嬉しいことはそうない。

「はあ、これでは夜に一杯、どうです？」

綾乃の所属する事務所から派遣されてきた新井が、助監督に意味ありげな笑みを浮かべながら誘う。

「河原町に店、とつてます」

新井の含む所がわかる助監督は、苦笑に顔を歪めた。

「新井はん、お好きですなあ」

「これがなくて、何が楽しみですか」

カンッ

笑った拍子に、新井の足が何かに当たった。

「ん？」

「何です？」

新井と助監督がのぞき込んだのは、時代劇の小物が雑然と積みれた棚の下。

よく見ると、茶釜だ。

「何でこんなものが？」

「タヌキが化けてるんですかねえ」

「はん。ま、いいですね。ヤカンのかわりになるでしょ。もらっていいですか？」

「東京までもつてくつもりですか？」

「こんな所に放り出してあるってことは、不要品でしょ？近頃、鉄分不足なんで」

「ま、いいでしょ」

一週間後 東京都葉月市内

「で、どうということ？」

鑑識の合間を縫って現場入りした理沙は、血まみれの台所を一瞥した後、部下に聞いた。

「何？近頃、この辺じゃこういう事件が流行なの？」

「知りませんよ。 ああ、犠牲者は台所で何かしようとして、そこを殺されたというところですね」

「台所で切り刻まれた理由と方法は？」

「不明です。 あ、犠牲者は池田里奈子25歳。職業は美容師。モデルのメイクを手がける事務所に所属しています」

「交友範囲を洗って。それから、現場からなくなっているものは？」

「それが、警部補」

部下の一人が、理沙を台所のコンロに案内した。

「コンロがついたままです」

「コンロが？」

「ええ。第一発見者は、被害者と同棲している新井貴文36歳、職業は芸能プロデューサーです。タバコを買いに出た帰りに、事件に遭遇したといっています」

「アリバイは？」

「マンション、コンビニ、町内の防犯カメラ、すべてに映像が残っています。時間的にはあり得ません」

「新井に、コンロがつきっぱなしな理由は確かめた？」

「それが」

部下は困惑した顔で言った。

「ヤツは、コンロには茶釜がかかっていたというんです」

「茶釜？」

「はい。京都の撮影所でもらってきたもので、鉄で出来たヤカンの代わりになるかもしれないって、水を入れて火にかけていたそうなんです」

「はあ？」

同じ頃 月ヶ瀬神社 水瀬邸

その頃、水瀬達は、依頼者まで含めて、茶釜の存在を忘れていた。「あればあったでそのうち出てくるでしょうし、もしかしたら、廃品回収に出しちゃったかもしれないし」

肝心の萌子の母親が、そう言い切ってしまったのだ。

何か厄介な代物だけど、実害がなければいい。

手がかりどころか、今の時代、本当に存在するかわからない代物を一々探す程、水瀬達も酔狂ではない。

むしろ、今この瞬間が事件と言えるほど、騒ぎが多い水瀬達の年頃では、とくにそうなる。

「遅い」

水瀬邸の縁側で、そう呟いたのは博雅だ。

長野の水瀬本家の倉の中から古い雅楽の楽譜が出てきたと聞いて勇んで来たというのに、肝心の水瀬が「制服に着替えてくるね」と姿を消してからすでに10分以上。

男の着替えにしては遅すぎる。

楽しみにして来たというのに、あいつは何を考えている。

「つたく、あいつ、何をしているんだ？」

笛を袋に戻した博雅は腰を上げると、水瀬の部屋を探して歩き出した。

歩いてみると、意外と広い。

幾度か角を曲がった先、襖の向こうからこそそと音がする。

ここが、水瀬の部屋らしい。

「おい水瀬！」

博雅は、声をかけながら、襖を開けた。

ノックもしないで……。

同じ頃 水瀬邸ルシフェル私室

ルシフェルは、茶道教室に通うため服を脱いだ。

着物の着付けは、練習したおかげで一人で出来るようになった。  
だが

「……」

着付けの本に書いてあった。

下着は着けるとラインが出る。

見られたいものではない。

ルシフェルは、タンスを開くと、一番奥に隠すようにいれてあった一枚を取り出した。

これならラインが出ないだろうけど……。

ルシフェルは、それをみつめながら唸った。

もし、何かの弾みで博雅君にこんなのをつけているのを知れたらどうなるだろう。

誤解されるだろうか。

軽蔑されるだろうか。

しかし。

ルシフェルは鏡の中の自分を見て覚悟を決めた。

私だってオンナだ。

これをつけてもいい位の年頃だ。  
よし。

ルシフェルは意を決してそれを身につける。

ちらと鏡に映った自分の姿を見るが、やはり何だか恥ずかしい。

自分が好色な女になったようでいやだ。

やはり今すぐにでも別な下着に取り替えたい。

でも、ラインが出て、それを指さされるなんてこともごめんだ。

ようは、知らなければいいんだ。

そう思い直したルシフェルが長襦袢に手を伸ばした時。

ガラッ

不意に襖が開くと同時に、唯一見られたい（本心）、最も見られ

たくない（建前）相手が顔を表せた。

「おい水瀬！」

「……」

「……」

しばし凍り付いた二人は、しばらくの間、凍り付いていた。そして、それが理解できた時。

博雅の視線は、全裸に近いルシフェル、こと、やたらと色っぽい下着に釘付けになった。

「きゃああああああっ！！」

胸を隠してうずくまるルシフェルにも、その悲鳴すら、釘付けになった彼の視線を外すことはできなかった。

あくまで博雅の視線は、ルシフェルの白い肌に描かれたTの字に食らいついて放そうとはしなかった。

「あ、ご、ごめん！」とはいうものの、だ。

「で、出て行って！」というルシフェルの言葉も意味は成さなかった。

「あ、ご、ごめん！」

「せめて見ないで！」

「あ……ご、ごめん」

「これだけ頼んでも聞いてくれないの！？」

ガンッ！

手近にあったものを片っ端から投げつけるルシフェルの攻撃を受け、博雅はやっと部屋から出て行った。

「どうしたの？」

廊下の角から顔を出したのは、お茶を持った水瀬だった。

「ルシフェルの悲鳴が聞こえた気がしたけど」

「あ、ああ、なんでもない」

頭にひっかかったものをむしり取った博雅は、そう言って水瀬を押しやって縁側に向かった。

「？」

「ち、ちよつとな」

無意識に手にしたものをポケットにねじこんだ博雅は、水瀬に作り笑顔を浮かべ、何とかごまかそうとした。

「博雅君」

「？」

「鼻血、出ているよ？」

「テツシュ、あるか？」

「」

「……」

しばらくした後、着物姿で出てきたルシフェルを、博雅は軽く100万回は惚れ直していた。

青を基調とした落ち着いた中に、ルシフェルの秘めた華やかさが醸し出されている。

それは、どんな芸術家だって具現化させることは出来まい。そのあり得ない美が、博雅の目を釘付けにして離さない。

「ねえ……博雅君、何かいってあげたら？」

「えっ あっ、ああ」

水瀬に促されたものの、言葉が思いつかない。

「惚れ直した？」

「もちろん って、何を言わせる！」

「だってさ。よかつね、ルシフェ」

しかし、二人は顔を合わせようとしない。視線を合わせられないのだ。

そういうことにとことん鈍い水瀬は、不思議そうに言った。

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

「ふうん……あ、ルシフェ、遅れるよ？」

「う、うん……」

ようやく、ちらっと博雅を見たルシフェルが小さく、呟くように言った。

顔も声も痛々しいまでに涙ぐんでいる。

「……エッチ」

それを聞いた博雅は言下に言い切った。

「せ、責任はとる！」

水瀬邸 玄関

楽譜を受け取った博雅は帰り、責任つてなんだろう。と、水瀬が考えながら玄関の草むしりをしている時だ。石段を上がってくる女性がいた。

「あれ？」

「お久し」

理沙だった。

「珍しいね。どうしたの？」

立ち上がり、タオルで汗をぬぐった水瀬に理沙が答えた。

「ちよつと頼みがあつてね」

「減棒の取り消し？」

「違うわよ」

理沙はバックから写真を撮りだした。

「ちよつと、厄介なヤマがあつてね？力貸して欲しいの」

### 第三話

水瀬邸 縁側

「あんだ、いい所に住んでいるのねえ」

応接を兼ねた広い縁側に通された理沙は、出されたお茶を飲みながら感心したように言った。

「まったく、世の中理不尽よね」

「よくわかんないけど、お姉さん、これ何？」

自分の前に広げられた数枚の写真を手にした水瀬が首を傾げた。

「すごく食欲なくすんだけど」

「現場写真。貴重でしょう？」

「見たくない」

「そう言わないで。助けると思って」

「……まあ、いいけど。これじゃ、何が何だかわかんないよ」

「でしょうね」

当然という顔で頷く理沙は言った。

「下にパトカー停めてあるから、現場、見に行ってくれる？」

「タダで？」

「当然でしょ？」

加納萌子の日記より

ルシフェルお姉様が教室に通って下さった最初の日。

とても嬉しい。

何より着物姿がとてつもなく似合う。

すっごい綺麗！！

着物は青。遥香様がお決めになった柄だという。

さすがにいいセンスされている。

けど、やっぱり素材よ素材！



お姉様が髪を結い上げているの、初めてみたけど、もうスゴイ！  
綺麗！きれい！キレイ！！キレイすぎ！

褒める言葉がとっさに思いつかなかったもん！

こんな綺麗すぎるお姉様と、横を並んで歩けるだけで、私、幸せ！  
「きつと男の人なら絶対惚れますよ」と心の底から思う。

「今、オトコの人については忘れたい」  
ポツリと言うお姉様。

気になる。

「どうしたんですか？」

「ちよつと、色々あつて」

うーん。噂では、あの秋篠先輩と付き合っていると聞いてはいる。  
あのゴツい朴念仁の何処がいいのか、私にはわかんないけど、まさか、あの人と何かあつたわけじゃないよね？

気になりつつ、茶室へ。

居合わせた全員の視線がお姉様へ集中！

すごい！居並ぶ他のお弟子さん達が霞んで見える！

茶道教室を初めて60年の師匠が両手放しで褒めちぎっていたわけ。

『萌子さんと二人で着物のファッションショーが出来る』とか何とか。

でも、肝心のお姉様ったら。

「目立つのかなあ」とポツリ。

「そりゃ、目立ちますよ。こんな美人なら」

「うーん」

「どうしました？」

「あんまり、目立つのって好きじゃないの。これから、どうしよう」  
「っていうか、お姉様の場合、美人過ぎるから目立つなって方がムチャですよお」

「萌子ちゃんの方が可愛いと思うよ？」

「私がカワイイのは当然ですけど、カワイイと美人は別です」

「　　そういうもののなの？」

「そうです。深みが違うんですよ。だから、どんなことしても、美人は美人なんです」

「よくわかんないけど、諦めろってことなの？」

「単純に言って、そうです」

#### 葉月市内警察署内

「やっぱり、わかんない？」

現場となった部屋からの帰り、警察署で死体を確認してもらった理沙は、廊下のベンチに座る水瀬に、残念そうに言った。

「気になることがあるんだけどね。ありがと」

コーヒー入った紙コップを受け取りながら、水瀬はそう言った。

「何？」

理沙もコーヒーを手にベンチに座る。

「あのね？殺され方なんだけど」

検死報告をめくる水瀬。

「検死報告に何か疑問点が？」

「これ、鋭利な刃物で切断されたってあるでしょう？」

「ええ。スパツと」

「ちがう。これ、別なもの」

「別のモノ？」

「うん。すっごく細くて強いワイヤーみたいなもので物体を締め付けて、それで切断したらこうなるよ」

どこから出したのか、水瀬はソーセージをナイフで切断した。

「これが、刃物での切られ方。でも、あの死体はそうじゃない」

「何でわかるの？」

「切断する時、刃物があたった所には必ず痕が残る。インパクトし

た一カ所だけ。けど、この切断面、それが全面についている」

ポケットから糸を取りだした水瀬は、一巻きソーセージに糸を巻き付けると、一気に糸を両手で引っ張った。

糸の力に負け、ソーセージは二つに斬られた。

「こういう感じ」

はい。とソーセージを理沙に手渡す水瀬。

「やっぱり、第三種事件？」

受け取った、理沙はそのまま口に放り込むとコーヒーを飲んだ。

「そうなるね」

「実はね？この事件、<sup>やま</sup>京都でも起きてるのよ」

「京都？」

「茶道の師匠が細切れにされて殺された。その殺され方がそっくりなのよ。警察が同一犯の犯行と見るに十分」

「被害者に関係は？」

「全くの無関係」

「物取り？」

「京都で無くなったのは茶釜と壁に貼り付けられていたお面だけ」

「茶釜と……お面？」

「そう。お面は、関係者でさえ、今朝になって無くなっていることに初めて気づいたほど、どうでもいい代物らしいけど」

理沙はコーヒーカップを弄びながら言った。

「不思議とね？さっき行った現場からもキツネの面が消えていたのよ」

「……物取りかもね」

そんなもの、どうするのかはよくわかんないけど。

水瀬はそうぼやいて、コーヒーに口を付けた。

「そうでしょう？」

理沙はまるで同情してくれと言わんばかりだ。

「まあ」

水瀬は言った。

「このテの系は、普通の人間の使いこなせる代物じゃないから、犯人は推測がつくけどね」

「？」

「魔法騎士か魔導師、もしくは呪具使い」

「ってことは？」

「お姉さん達の部署の仕事だね。特殊事件捜査班　　だっけ？」

「ったく、冗談じゃないわよ」

理沙は不平そうに言った。

「予算はないわ、権限はないわ。指揮系統ですら不明確。辞令受けた時、何て言われたと思う？「ついに出世がなくなったな」よ！？全く、どうして私が」

「でも、警察が第三種事件に本格的に介入するつもりになったってことでしょう？」

「あの戦争で、イヤってくらい妖魔見せつけられた宮内省と警視庁の妥協の産物よ。近衛軍がこれ以上、第三種事件で兵力を割かれたくないってね」

チラリと水瀬を見た理沙は言った。

「　この辺は、君の方が詳しいんじゃない？」

「知らない。でも、警視庁騎士警備部に対妖魔特殊戦闘班として創設したんだよね？確か、お姉さんと岩田警部が指揮を執るんだよね？」

「今のままじゃあ、無意味に近いと思ってる。あの連中」

「なんで？」

理沙はため息混じりに言った。

「キミ達見てるからよ」

加納萌子の日記より

だからこの教室は嫌い！！

足が、

足が痛いよお……。

「大丈夫？」

心配そうに声をかけてくれた上に、さすってまでくれるお姉様。優しいな。

やっぱり、あの暴力女とは全然違う。

「お姉様こそ、大丈夫ですか？」

「平気」

ずっと立ち上がるお姉様。本当にスゴイ。

けど……。

「本当ですかあ？」

つんつ。

軽くお姉様の足をつついた途端。

「凸凹#reverse!？」

声にならない悲鳴をかみ殺しながら、お姉様がへたり込んだ。痛そうに足を押さえるお姉様。

「だ、大丈夫ですか？」

お姉様は、ただ無言で首を横へ振った。

クールビューティーなお姉様。

やっぱり、立ち振る舞いも洗練されている。

そんなお姉様だから、やっぱり、我慢してるんだなあ……。悪いことをしたと思う。

## 葉月警察署内

「糸？」

理沙から報告を受けた岩田が怪訝そうな顔で水瀬に訊ねた。

「糸とは？」

「不明です。ただ、切り口からして、人間の髪の毛より細いワイヤ……いえ。ワイヤーソーを想像して頂ければ、凡そ間違いではな

いと」

「人間の技術でも作れるな」

「操作ができません。一本ならともかく、複数を同時にコントロールするなんて不可能です」

「なぜ、複数本と？」

「一本なら力をかける場所にどうしてもムラが出ます。引っ張る力の強弱が生じますから。でも、複数本なら」

「成る程な。で、どんな呪具だね？」

「れい」

言いかけて、水瀬は口をつぐんだ。

カマをかけられたことに気づいた水瀬だったが、後の祭りだ。岩田は何もないという顔で、

「ま、今日はゆっくりしていつてくれ」

真っ青になった水瀬の肩に手を置いた。

「カツ井くらいだしてあげよう」

## 第四話

葉月警察署 地下

ガシャン！

水瀬の目の前で鉄格子が無情にも閉められた。

「お、お姉さん！？」

鉄格子越しに水瀬は抗議の声を上げた。

「こ、これはあんまりでは！？」

「カツ井、出してあげるからね」

ニンマリとした意地の悪そうな笑みを浮かべた理沙は、それだけ言々と留置所を出て行った。

水瀬は困惑するしかない。

「脱獄って、やったら問題だよなぁ？」

その気になれば、テレポートでいくらでも逃げられる。被害を無視すれば警察署ごと破壊してもいい。だけど。

「やったら、怒られる程度じゃ済まないよねえ……」

どうしたものか。と、水瀬が目を閉じて思案に暮れかけた時、

「出せえええっ！！！！」

誰かが叫んでいる。

「出すのじゃあぁあっ！！！」  
うるさい。

「妾が何で人間風情に囚われねばならんのじゃあぁあっ！！！」  
あれ？どこかで聞いた声だ。

耳を澄ませ、相手がどこにいいのか確かめようとする。  
どうやら隣の牢からだ。

「うわぁぁぁん！！出してくれええっ！！！」  
怒鳴り声が涙声に変わった。

「かのん？ねえ、かのんじゃない？」

「え？だ、誰じゃ？」

「僕だよ。悠理」

「ゆ、悠理！？な、なんじゃ、お前、こんなところにいるなら、さつさと出してくれ！」

「というか、僕もかのんと同じ立場なんだよ」

「……」

はあああつという大きなため息が留置場に響く。

数分後

「で？かのんはどうしてここへ？」

「店に泥棒が入ったんじゃ」

「泥棒？」

「そうじゃ、ご主人様が保管していた大切な品がいくつも盗まれた。妾の厳重な監視下にあった店内から忽然と、じゃ！これはきつとあれじゃ！怪盗、しかも大がつくような大物の仕業じゃ！」

「店番の時に居眠りしてて、気が付いたら盗まれていたんじやなくて？」

「な、何故知っているんじゃ！？」

「適当」

「クッ……」

「で、おばあちゃんに怒られて」

「うつ……」

「見つけるまで帰ってくるなと言われて、やむを得ずこつちへ」  
「うつ……」

「で、何かしでかして警察に捕まった。と」

「うわあああああんっ！！妾はただ、マネ事をしただけじゃ！」

「何の！？」

「盗賊じゃ！向こうが盗むなら、妾が盗んでも問題はない！」



「大ありじゃないかなあ」

「じゃから、妾はめばしい所にあたりをつけ、忍び込んだんじゃ」

「ちなみにどこへ？」

「大きな金庫じゃ。大日本帝国銀行券というのがたくさん入ってた」

「看板に銀行って書いてなかった？」

「低位魔族語のスラングではギンコとは盗品のことじゃ！」

「人間界の日本語での銀行は、ミラーシャの意味だよ」

「何！？」

「魔界で言えばグリンゴッツに盗品があるというのと変わんないよ？」

「そ、そうなのか！？」

ちなみにグリンゴッツとは、魔界最大の銀行、日本で言えば帝国銀行に相当する大銀行のこと。

なお、かのんが忍び込んだのは地方銀行に過ぎない葉月中央銀行の大金庫だから、規模は当然違うが。

「かのん、音だけで判断したんだね」

「……はうううつ」

かのんは泣き叫んだ。

「どうすればよいのじゃあああつ！グリンゴッツに忍び込んだなんてご主人様に知られたらお仕置きじゃあ！三 木馬の刑じゃあああつ！」

「あのね？かのん。グリンゴッツは関係ない……」

「ムチで百叩きにロークの刑に……ああつ！ホル踊りはいやじゃあああつ！！縛られて吊されるほうがマシじゃああつ！！」

「かのん、聞いてる？」

「“ぼんてーじ”とかいう人間界の格好したご主人様が妾を縛り上げてムチ片手におっしゃるのじゃぞ！”跪いて靴をお舐め”と！ああつ！その度に妾がどれほど あたっ！！」

パカンッ！

留置場の中に神音の悲鳴と軽い音が同時に響いた。

「？」

何とか隣を見ようとするが、当然、見えはしない。  
ただ、

「ご、ご主人様！？」

という驚きを隠せない声だけが、何が起きたかを知る唯一の術だった。

「おばあ、ちゃん？」

壁越しに凄まじい殺気が水瀬を襲う。

まともに受けているかのんはたまらないだろう。

「かああのおおんなんん？」

地獄の底から響くような声が場の空気を凍り付かせる。

「ご、ご主人様、これはその」

居住まいを正し、弁明を試みるかのんを前に、引きつった笑みを浮かべるかのんの主、神音だ。

「誰が、コスプレして、あなた相手に楽しんでいることをしゃべっていいと？」

「そつちですか！？」

「さあいらっしやい！商品を盗まれ、人間界で騒ぎを起こした罪！その体で支払ってもらいましょう！」

いいつつ、かのんの首根っこを掴むかみね。

「いやあああつ！恥ずかしいのじゃあああつ！」

「あ、あの、おばあちゃん？」

「あら水瀬、お久しぶり」

声色だけは普段通りになるかみね。

「あの、事情を説明して頂けないでしょうか？」

そういう水瀬に、神音はにべもなかった。

「また今度ね？今日はね？この子に隷従と被虐の悦びをたたき込むという大切なお仕事が」

「セーラー服着て先輩後輩プレイも、看護婦プレイや小児科プレイも！とにかく恥ずかしいからイヤじゃ！ご主人様、せめてノーマルで！」

ガンッ！

ひときわ大きな音がして、ついにかのんは沈黙した。

「あ、あの……？」

「コホンッ。水瀬」

「はい？」

「今までのこの子の発言は、全て忘れなさい」

「は、はあ」

「そうしたら、耳寄りな情報を教えてあげます」

「耳寄りな情報？」

「申し入れは受け入れてくれますね」

「じゃ、まずその情報を」

「受け入れてくれますね？」

「つていうか、おばあちゃん、どこから」

「う・け・い・れ・て・く・れ・ま・す・ね・？」

「……はい」

逆らうと無事では済まない。

水瀬はそう、判断した。

「じゃ、水瀬。また後日改めて。ああ、さつき樟葉だっけ？あの子が警察署に入ってたわよ？」

葉月警察署内 射撃訓練室

銃声が響き渡り、水瀬の耳元に着弾した。

「わーん！樟葉さん！ひどいよおおっ！」

泣き叫ぶ水瀬はワイヤーで縛り上げられ、お腹の当たりに大きな  
的を貼り付けられていた。

「うるせえ！始末書だけじゃ飽きたらず、警察の世話になるたあい  
い度胸だ！」

銃声。

樟葉が水瀬という的めがけて撃った音だ。

的にこそ当たっていないが、当てようとすれば当たる位置に着弾  
させている、つまり、わざと外していることだけは確かだ。

「近衛の恥をどこまでさらす気だ！？」

銃声。

「せめて訳を聞いて下さあい！」

「オトコが言い訳するな！」

銃声。

葉月警察署 特殊事件捜査班内

「これが、犯人だと？」

「はい」

難しい顔で目の前に出されたものをにらみつけるのは、岩田だっ  
た。

「これが、どのように？」

「これです」

そう言って、符がはられた筒から何かを取り出したのは、着物姿  
のルシフェルだった。

「？」

岩田には、それが何だかわからなかった。

何かの童話に出てくる、バカには見えない糸でも出されているよ

うな、そんな気がした。

「手にとってみてください」

「どれ？」

手の上に落とされたのは、細い糸だった。

かなり細い。太さは直系で0・5ミリ以下だろう。

「？」

引っ張ってみるが、かなり強い。

「この釜の中にいるモノがはき出した糸です」

「これで人間を細切れにしたというのか」

岩田の目の前には、星羅によって封印された茶釜が置かれていた。周囲は、ルシフェル目当ての男子職員が壁を作っている。

「呪具、か」

触りもせず、ただ茶釜を見つめるだけの岩田。

「封印はしていますが、破壊は困難です」

「コンクリートで固めて日本海溝にでも沈めてしまうか」

「取り決めに基づき近衛で管理します。今日は、説明だけ」

「取り調べも出来ないのか？」

「茶釜相手に？」

少し驚いたという顔のルシフェルから視線をそらし、岩田は黙った。

「まったく、第三種事件というのが、これほど厄介だとはな」

「今回の一見に関し、被害はなし……といたいのですが」

何故か、ルシフェルが肩を落とした。

「何か、あったのか？」

「茶室からキツネの面が消えました」

「キツネの面？」

「はい。茶道の先生の母上が数十年前、購入したのを壁に飾っていたそうです。それが忽然と」

「……君が盗んだと？」

「いえ。さすがにそうは思われていません。師匠自身、偶然気づい

た程度で、無くなっても困りもしないそうですが……気になったので」

「わかった。他にも気づいたことがあったら適宜教えてくれ」

「今後、調査等につきましては、協力するものと聞いています。とにかく、水瀬君の釈放を認めて頂きたい」

「わかった。とりたいが」

「ちらりとルシフェルを見る岩田。」

「何ですか？」

岩田は理沙がいないことを確かめたあと、居並ぶ男子職員を代表して訊ねた。

「どこの飲み屋で働いているんだ？一度、顔を出したいんだが」

#### 葉月警察署駐車場

「ったく、あのバカ息子！」

リムジンの後席で、樟葉が怒り心頭のまま言った。

「警察に捕まったなんて聞いたから、何事かと思ってきてみれば！」

「まあ、水瀬君のしたことは警察への協力ですし、水瀬君のおかげで持ちつ持たれつの関係が維持されていると考えれば」

「……姉として心配したのよ」

ポツリと呟く樟葉。

「姉として？」

「私生活じゃただでさえ危なっかしい子だから、いつだって心配してるのよ？それでも」

「私だって、戸籍上は水瀬君の姉です」とルシフェル。

「まあ、あんたのおかげで少しは心配が薄れて楽なんだけどさ」

「で、お互いにとって不肖の弟の件ですけど」

「？」

「トランクから出してあげませんか？」

## 第五話

千代田区某所地下施設第二ゲート前

「くたばれええっ！」

ガガガガガッ！

機銃座に据えられた12・7ミリと7・76ミリガドリング砲が火を放ち続け、圧倒的な火線を、そして曳光弾が龍の舞の如き線を描きあげる。

重装甲を施した戦車でも持つてこなければ防げる代物ではない。

だが

「くそっ！」

それほどの火線を展開する機関銃部隊の兵士達は撃ち続けながら青くなっていた。

弾丸が全く当たらないのだ。

一分間に数千発の弾丸を撃ち続けているのに、当たらない。

その理由は、兵士達にはわかっていた。

「こいつ、騎士だっ！」

「トラップで仕留めろっ！」

「了解っ！」

兵士の一人が、機銃座の防御シールドに引っかけてあったレバーを引いた。

バンッ！

鈍い音と共に、壁の一部が吹き飛び、反対側の壁に無数の弾痕があいた。

壁に仕込まれた指向性対人地雷が一斉に火を噴いたのだ。

「やったか！？」

「違うっ！」

機銃にとりついた兵士は怒鳴った。

「まだ来るっ！」

「どうやって!？」

「知るかよっ！」

本部！騎士はまだか！」

千代田区某所地下施設 休憩室

地下施設には非常事態を告げるアラームが鳴り響き、近衛騎士達が武器を手に配置につく。

『侵入者警報！警戒コンディションをAに引き上げ。各員警戒、防御隔壁緊急閉鎖。警備担当部隊は速やかに所定の配置についてください。非戦闘員はマニュアルE所定の』

「ここへ？どこの物好きだ！」

休憩室でコーヒーを飲んでいた若い騎士が同僚に毒づきながらも腰の剣の具合を確かめた。

「よっぽど死にたいんじゃないのか？」

「そっちな」

同僚は肩をすくめると、壁にかけてあった大薙刀を手にして軽く振った。

「ここの意味を知っていれば、普通は攻めなくなるもんさ」

『警護中隊各員に告ぐ！』

アラームをかき消さんばかりの野太い声が、各所に仕掛けられたスピーカー一杯に響き渡り、駆け出そうとして止まった。

『既に侵入者はトラップ及び第一ゲートを突破。第二ゲート防衛隊との通信途絶！』

「なっ!？」

『“奥の院”への侵入は絶対に阻止せよ！既に第一、第二防衛部隊は全滅！』

第三防衛線の配置についた騎士達はぎょっ。とした顔でスピーカーを見た。

『承明門を最終防衛線に指定！騎士はすべて承明門に集結！いいか



「死んでも通すな！」

それから10分後

「ぎゃっ!？」

暗闇の中から現れた敵に一斉に襲いかかった騎士達が、逆に一斉に吹き飛ばされた。

「ぐっつ！」

先程の若い騎士もその中の一人。

まともに地面に体を叩き付けられたショックで息が止まった。

「くっ」

痛む体を見無視して、立ち上がろうとした彼は、自らの体に起きた変化に目を見開いた。

体が 動かない。

指一本、まともに動こうとはしない。

「な……何故？」

魔法か？

一瞬、そう思ったが、彼の知識はそれを否定した。

自分の身につけている甲冑は対魔法戦闘を前提とした代物。

電撃や麻痺系の魔法がこの甲冑の前に有効なものか！

だが では？

コッ……コッ……コッ

不気味なまでの静寂の中、靴音だけが妙に高く聞こえる。

指一本動かすことの出来ない彼の横を誰かがすり抜けようとしていた。

「く……くそっ」

何とか動く目で、彼はその相手確かめようとした。

そんな馬鹿な！

その姿を認めた彼は、呆然とその人物の動きを見つめるしかなかった。

彼は知っていた。

その相手が誰かを

だからこそ、信じられなかった。

否。

信じたくなかった。

「ひ……姫さん？」

ギギギ……ッ。

かつてのその人物の愛称を口にした彼の目の前で、最終防衛線に指定された承明門。そう呼ばれた扉が開かれたのは、その直後だった。

「ば……馬鹿な……」

翌朝。

水瀬が警察から引き取られ、重営倉にぶち込まれた翌日のこと。

水瀬とルシフェルは萌子の母親に呼ばれ、とんでもないことを告げられた。

「茶釜に逃げられた？」

「そう。ものの見事に」

地下施設の警戒が普段以上に厳重で、ようやくたどり着いた場所は茶室。

茶釜から聞こえる湯の音は、ただ聞いているだけで心地よくなる。そんな中、

「あのねえ！」

バンッ！

萌子は畳を叩いて怒鳴った。

「お母さん！」

「ママ」

「どっちでもいい！」

「よくないわよあ」

萌子の母は不服そうに言った。

「相手の名前つてのは、大切な意味があるのよ？だから」

「言霊の講義なんて聞きたくない！そんなことしてる場合じゃないでしょう！？」

「そう？」

不思議そうな顔をして娘に茶を勧める母。

「そう？つて」

萌子はアゼンとした顔で目の前の母を見た。

「どうしてそんなに落ち着いていられるの？」

「あら？良いところに気づいたわね」

母は微笑みながら言った。

「ちゃんと対策はしてあるからよ」

「対策？」

「そう。釜の中に居場所を知らせる呪符と、爆発する呪符を貼り付けておいたの。ほら。これ」

自慢気に二枚の呪符を見せつける母に向けられた頼もしそうな視線は、すぐに不審のそれに変わった。

「やつぱり、私って天才だわあ」

「あの……」

「天才つて、何しても上手くいくのよねえ」

「だから……」

「何？」

「なんで、貼り付けた呪符がここにあるの？」

「……」

「……」

呪符と萌子の顔を交互に見比べた母は、不思議そうに言った。  
「なんでかしら？」

「つまり」

茶をすすった水瀬が言った。

「呪符を貼り付けたから安心だと思って、そのままにしていたら、いつの間にか逃げ出していた。と？」

「そう。懐かしい娘が訊ねてきてくれたから、嬉しくてねえ」

「娘？」

「そう。久しぶりに日本へに来たといって。1時間も話し込んだわ」

「お客様があつたんですか？」

「お客様と言えばお客様ねえ」

「はあ？」

「だって、この結界破つて、止めようとした警備騎士さん達も、死なない程度で何人もノされるし。何より、誰かに操られっぱなしだったから。誰かなあつて」

「ここ、襲われたんですか？」

確かにおかしい。

侵入者を排除・迎撃する強力な結界が張られ、警備も近衛の選りすぐりが配属されている、日本、いや、世界的に見ても有数の警戒厳重区域だ。

水瀬ですら手こずる防衛体制。

それをぐぐり抜けて、出ていった者がいる？

しかも、無血で？

「る、ルン？」

「水瀬君、現実とアニメをこっちゃんにしない」

「……というより」

ルシフェルは首を傾げた。

「……ヘン」

「へん？」

「そうでしょ？」

茶を点てる萌子の母の手元をじっと見つめながら、ルシフェルは言った。

「それほどの騒ぎで、どうして私達に動員命令が出なかったの？どうして、その騒ぎが私達の耳に届かないの？」

「……そういえば」

「あら？二人とも、聞いていないの？昨晚の騒ぎ」

「はい」

「何も」

「……ふうん？」

萌子の母は少し考えた後、ぽつりと言った。

「まあ……無理もない……か」

「あの……ママ？」

怪訝そうな娘の声に、萌子の母はびっくりして娘の顔を見た。

「う、うつん？気にしない気にしない！痛い痛い飛んでけーっ

！」

「はあ？」

「それより、話したわよね？ママは」

「へっ？」

「その娘が“誰かに操られっぱなしだった”って」

「……なんでわかるの？」

「“視れば”わかるでしょう？萌子ちゃんだって、私と由忠様の血を引いているモンスターなんですから」

「娘をモンスター呼ばわりするなあっ！」

萌子が暴れるのも無理はない。

実の母親からバケモノ呼ばわりされて、娘が喜ぶはずがないだろう。

だが、母親はにつこりとほえんだ。

「かわいいじゃない。ママ、あの電気トカゲとか大好き」

「……私……私は……」

滝のような涙を流す妹の頭を撫でながら、水瀬は訊ねた。

「それで、その操っている人って、わかつたんですか？」

「ええ。懐かしい人よ。まだ生きているとは思わなかった」

「……心当たりが？」

「もちろん」

萌子の母は自信満々に頷いた。

「だ、誰です！？」

「面識は一度しかないけど、『白拍子』って呼ばれているわ」

「白拍子？」

「そう。知らない？男装の遊女が今様や朗詠を歌いながら舞うの」

「そっちは知っていますけど……」

「あのさあ」

萌子があきれ顔で訊ねた。

「つまり……ママのご親戚？」

「磯<sup>いその</sup>禅師とは血縁なかつたはずだけど？」

「じゃなくて！」

「よ、よくわかりませんが」

妹が暴れ出そうだったので、水瀬はさっさと結論を出すことにした。

「その侵入者は、その“白拍子”に操られていた。ここまで突破出来たのは、その“白拍子”の力ですね？」

「うっん？あの娘の力」

「……え？」

「だから、あの娘の力よ」

「だ……誰ですか？」

「教えない」

「どうして？」

「教えちゃったら、私が樟葉ちゃんに怒られるもん」

「……何故、樟葉さんが？」

「樟葉ちゃんがあなた達に教えていない。そこに何か裏があると思うのが普通でしょ？」

萌子の母は言った。

「何より、ここではあなた達は樟葉ちゃんの部下なんだから」

「……」

「まあ、あの子が茶釜の蜘蛛を持って行ったのは間違いないけど」

「どうして止めなかったんですか？」

「面白そうだったから」

「……」

にべもない返事に、水瀬は二の句が継げなかった。

皇室近衛騎士団 樟葉の執務室

「昨晚、あそこに侵入者があったことは把握している」

水瀬とルシフェルを前に、樟葉は冷たい視線で、

「それがどうした」

「……あの」

「同時に、何か呪具が奪取されたこともだ」

「僕達」

「既に他部隊が奪還任務に従事中だ。それと、あそこ的一切については、厳重な箝口令が敷かれている。お前達も近衛の一員なら、その意味を正しく理解しろ」

「……あの？」

「下がれ。私は忙しい」

革張りの背もたれの高い椅子に腰を下ろした樟葉の目は殺気立つ

ている。

その眼光に気圧され、樟葉の横に立つ篁副官の気の毒そうな視線に励まされるように、二人は敬礼の後、樟葉の部屋を出た。

パタン。

「……ハアッ」

樟葉は二人が部屋を出た途端、力尽きたように椅子の背もたれに体を預けた。

「全く……なんて事態よ」

「侵入者に関する情報は、これを除いて、すべて抹消させました」  
篁副官が執務机の上にDVDを置いた。

「現地の全部隊への記憶操作は本日1500までに終了」

「……馬鹿げている。そうは思わないか？」

「無理ありません」

DVDの上に突っ伏した樟葉に篁副官は複雑な感情を浮かべた顔で言った。

「あの地に侵入を許したこと。そして、その侵入者の素性……この二つが近衛内部に広がれば、とんでもないことに」

「……その最悪に輪をかけてくれそうなのが今、目の前から消えてくれた……」

「私も、あの子とのことは、噂でしか知りませんが」

「噂だけで十分よ。本当、真実をあの子が知ったら悪夢よ？何しろ

」

「ストップ」

カチッ。

篁副官が、樟葉の言葉を止めるなり、机のボタンを押した。  
ドアの開閉ボタンだ。

「きゃっ!？」

「わっ!？」

突然、ドアが開いたせいで部屋に転がり込んできたのは、水瀬と



ルシフェルだ。

ドアに耳を押し当て、樟葉達の会話を聞いていたのは間違いない。

「お前等」

「……つまり」

樟葉の執務室前でバケツを持つルシフェルが横に立つ水瀬に訊ねた。

私がいって言うまでそうしてろ！

樟葉はそう怒鳴って二人にそう命じた結果だ。

「その侵入者って水瀬君の知り合いだってことだよね？」

「白拍子に知り合いなんていたかなあ……？」

両手どころか頭にまでバケツを乗せられた水瀬は首を傾げようとしてやめた。

「でも……」

「やっぱり、ヘンだよな？」

ルシフェルでも、そう思わざるを得ない。

「樟葉さんは、侵入者があったことそのものをもみ消そうとしている」

「責任問題になる？」

「責任はあるだろうけど、そんな姑息なマネする人じゃないでしょう？」

「……おかしいよねえ」

「しかも」

ルシフェルはそこに一番ひっかかった。

「近衛に関係した人だったみたいだね」

「そうだね……近衛追放された人かな？」

「うん……でも」

バケツの水をこぼさないように足を軽く動かしたルシフェルは呟いた。

「どうして、樟葉さんはその侵入者から水瀬君を遠ざけようとするんだらう?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3810e/>

---

茶釜と狐と怨霊と

2010年10月9日01時24分発行